

オランダの降雨データを見ますと、10月中旬～2月末まで断続的に雨が続き、5か月近く雨が続いた事になります。25年前の1998年(私は入社前)にも収穫期に雨が多かったそうですが、後半には雨が止んでおり、今年のような規模の水没被害は非常に珍しい事です。

【2023年オランダ産は大欠品も、不人気品種はほっとしている!?!】

近年、オランダの収穫結果は悪いことが多く、輸出会社にショート率を尋ねれば「今年は肥大が悪く10%くらいショートした」「今年は去年より更に悪いから15%ショートだ」などと表現しますが、話半分で実態はそれほど悪くはなかったと感じます。

今年の水没被害が大きいと逆に安易にそうしたコメントを言えませんが、作付統計のオリエンタル・OTの販売球面積が $924+1001=1925\text{Ha}$ に対し、収穫断念した圃場や収穫したものの外傷や芽の水害で出荷できないなどを含めると、5%程度は雨で実害を被ったと想像され、肥大不足によるショートも加えると、15%程度のショートだと言っても違和感はありません。パッキング用の黒コンテナの製造会社に在庫が多く残っているなどの話もあります。

※ショートはそれぞれの収穫見込と結果の差であり、見込みが甘かった(結果的に売り過ぎていた)場合など、一部の球根取引は旧態依然のお天気屋な世界観も残ります。

日本市場は、オリエンタルOTの収穫前時点では、前年を超える球数を確保できている事も多く、収穫結果が良かった2021年産は、日本の輸入球数は前年とほぼ同じでした。一方、収穫時のショートによってそれが削られ、代替が見つからない場合は減少せざるを得ません。

日本が長年減少を続けてきた背景には、品種の固定化とそのショートが影を落とします。この現象は、徐々に他国でも見られてきており、アジア圏で人気の赤OTのショートに対し、別の品種は代替にならないなど、市場構造や品種の安定期に入りつつあるのかもしれない。

LAは水害は限定的でしたが、収穫結果はオリエンタル同様良くありませんでした。

販売球面積(作付統計)も2022年産1151Ha → 2023年産1062Haと減少したにも関わらず、収穫後も在庫がややだぶついた印象で、仮に肥大が悪くない年だったら大きな問題になっていたかもしれません。近年、アメリカの好景気を受けて中米での切花生産/輸出が急拡大してきましたが、昨年後半から一旦落ち着いたと見られており、2024年オランダ産は中南米の需要変動の予測と、作付面積が適度に調整されるかが相場形成のポイントになりそうです。

【情報の弊害】

2023年オランダ産に関しては、昨年春(3～5月ころ)に拡散された主要な情報が(“シベリアの大幅減少”、“(毎年ですが)LAが不足する”、“バンドームが余る”など)、面積統計や収穫結果と違っていたことが多かったように思います。流れてくる情報の中には、営業的にマーケットを扇動する(取引を促す)ためのプロパガンダではなかったのか?と心配になるほど実態に反するものもあり、特に植付時期にブローカーから流れる情報(生産見込みや値上げ勧告)には注意が必要だと感じています。今年の世界需要がピークアウトする可能性もあるため、2月に来日した輸出会社からは、慎重に仕事を進めるとのコメントがありました。